

「頭でっかち」とは

日本語には「頭でっかち」という言葉がある。この言葉は、知識を詰め込んで理屈ばかりを言う人、物事を素直に受け取ることができない人を指して用いられる。いわば、知識を得ることの否定的側面とでも言えるかもしれない。今回は、「教えを学ぶこと」と「信仰を深めること」の“あいだ”について、イスラームを代表する神学者であり神秘主義者であるガザリー (Abū Hāmid al-Ghazālī, 1058 ~ 1111) を取り上げ、知識の探究という視点から考えてみたい。

確実さの3つのレベル

イスラームでは、教えを深めることは知識を得ることであるとみなされているように思われる。筆者が理解する限りでは、信仰篤きムスリムたちは次のように考えている。「信仰とは神を求めることである。神を求めるには、神やイスラームという宗教についてもっと知らなければならない」と。その結果、漠然と信じるというレベルから、教えを信じ深めるといふレベルへ進むために、教えを学ぶという段階へ進む。その手段の一つが書籍から得られる知識である。

イスラーム神秘主義思想では、私たち人間が確実なものともみならず知識として、次の3つのレベルを想定する。①「確実さに関する知」(‘ilm al-yaqīn)、②「確実さの本質」(‘ayn al-yaqīn)、③「確実さについてのリアリティ」(ḥaqq al-yaqīn)。これら3つは原文で表記する方が語感が良いように思うが、可能な限り意味を日本語で説明するため、少々ざこちない翻訳となっている。

第1レベル「確実さに関する知」とは、私たちが日常的に接している事物の存在を、知を通して確実なものとするのである。私たちは見たことも聞いたこともない事柄であっても、知識として理解することが可能である。例えば、火という存在を知らなくとも、その存在を言語的に説明することができる。目に見えないが概念として存在しており、私たちは言語を通してその存在を知っている。

第2レベル「確実さの本質」とは、ある存在の本質を通して確実なものとするのである。たとえば、炎を発しないが赤く光る炭を見てそれを「火」として認識し、遠く見える太陽の本質を「火」として認識する。いずれも肉眼で火を確認できていなくとも、物事の本質を理解している。

第3レベル「確実さについてのリアリティ」とは、ある事柄をリアルなかたちで体験することによって、確実さを得るレベルである。私たちの身体が炎にくるまれるとき、火のリアリティを身をもって体験する。あるいは、私たちが火そのものとならないと、私たちは火という存在について真の意味で確実に知ることができる。

したがって、「火」という存在を私たちのなかで確実なものとするためには、私たちはそのリアリティを知るしかないのである。「火」を「神」や「神の言葉」に置き換えるとき、私たちはそれらを確実に理解できたと言えるだろうか。

ガザリーが到達した確実さ

世界史の教科書で扱われているイスラームの内容は限られている。しかし、ガザリーはイスラームを代表する思想家として登場する数少ない人物である。ガザリーも「確実さに関する知」という言葉を用いているが、彼はそれを、「一点

の疑念も残らず、誤謬や妄念の可能性もなく、それらを想定する余地すら残さないような形で、知の対象を明らかにする知」と理解する。⁽¹⁾

ガザリーは若くしてイスラーム諸学を修めるとともに、時の権力者に引き立てられることで、バグダードのニザーミーヤ学院で教授する立場にあった。いわばエリート中のエリートであった。しかし、彼は1095 (ヒジュラ暦488)年に学院を離れて、11年間の隠遁生活を始めた。知識を教授する立場にあった彼が教授職を離れた最大の理由は、自らの知識をもちや確実なものと考えられなくなるという精神的葛藤にあったと思われる。

彼の状況を先の3つの確実さからみれば、彼は教えを第1レベルと第2レベルまで理解していたが、第3レベルには達していなかったのだと言える。もちろん、彼は当時の最大の思想家の一人であり、彼の精神的葛藤は私たちと次元が異なると考えなければならない。アシュアリー派の神学者として、彼は神、聖典クルアーン、またハディースなど、イスラームに関わる学問を教えていた。しかしながら、自分自身が真の意味で神を理解し、教えを理解しているかと言われたならば、そうではないと考えたのだろう。

そこで、彼はすべてのものを投げ出し、スーフィーとして隠遁し、神に専心する生活を始めた。彼は知識を得ることの傲慢さや、実生活で体現できていない人々の心の弛みを批判する。その後、彼は突如として権力者から第一線に再び呼び戻され、隠遁生活から復帰した。彼は隠遁生活から俗世へ「帰る」ことについて、次のように述べている。

私にはわかっていることだが、たとえ私が知識を広めるために帰るということになったとしても、私は同じ所に帰るわけではない。というのは、「帰る」ということは、過去の状態に戻るからだである。私は以前は、名声を与えてくれる知識を広め、私の言葉と行為によってそれを奨励していたし、それが私の意図であり、目的であった。ところがいまは、私は名声を棄てさせ、名誉ある地位を落とすと知られている知識を進めているのである。⁽²⁾

神学や法学を通して知識を学ぶことこそが、教えを学ぶことであると考えられてきた一方で、彼はもはや「同じ所」に帰ることはない。信仰のレベルを深めた彼は、概念や頭で分かっているだけでは確実ではないと主張する。むしろ、身をもって神を知り教えを学ぶことの重要性を説くのである。しかしながら、彼は既にある神学や法学を学ぶこと自体を否定したわけではない。教えを知ろうとしない人間は論外だが、教えを知っているからと傲慢になってはいけない、と述べているのである。

「教えを学ぶこと」と「信仰を深めること」の“あいだ”にあるものとは何か。「頭でっかち」ではいけないが、何も知らずに体を動かしていればよいというわけでもない。本当の信仰とは、両者をより高めていくことでしか到達できないのかもしれない。

[註]

(1) ガザリー『誤りから救うもの』(中村廣治郎訳) ちくま学芸文庫、2003年、15～16頁。

(2) 同上、95頁。